

一茶生誕250年

俳諧寺

一茶肖像

春甫 屢信 寫



目おぼろきもちり位之り春一茶

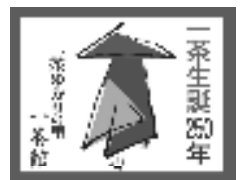
村松春甫 むらまつ-しゅんぽ 1772-1858 江戸時代後期の俳人で絵師。安永元年生まれ。小林一茶の門人。狩野派の絵をまなび、師の肖像のほとんどをえがく。編著に一茶門人の句をあつめた「董艸(すみれぐさ)」。安政5年8月死去。87歳。名は熙。字(あざな)は処信。別号に董庵、胡庵、鷗巢。



一茶ゆかいの里 一茶館

TEL 026-248-1389 FAX 026-248-8913

〒382-0825 長野県上高井郡高山村高井 5161-1



○一茶の風貌 東末露香（つかまつろこう）『俳諧寺一茶』から

- 1 背はあまり高くなく、横に広がって見えるほど肥っていた。
- 2 顔はでかくてほおはふっくら、目は細く口はでかい。
- 3 広いひたいには深いしわが刻まれほおぼねが張り目尻は長く切れていて、鼻は小鼻が大きい。
- 4 でかい口の唇は厚く、耳たぶは豊かに垂れている。
- 5 手足はわりと大きく、ことに手の指が太くて節くれ立っていた。

○俳号一茶の由来 「寛政三年紀行」

「西にうろたへ東にさすらひ、一所不在の狂人有。あしたには上総に喰い、夕には武蔵にやどりて、しら波のよるべをしらず、立泡の消やすき物から、名を一茶坊といふ」
 （一茶と名のつたのは、寄る辺なき身の、茶の泡のごとく消えやすいものの意味から。）

○勉強家だった一茶

一茶は大変な勉強家で読んだ書物は、古来の歌集はもちろん物語や紀行、随筆、中国の古書など数百に及びました。一茶は、「いろは別雑録」といった手製の辞典までつくっていました。一茶の句はだれにも情景が浮かぶ平明な句が多く、親しみやすい作風のせいか、たゆまぬ勉強や努力を感じさせません。しかし、句日記など直筆はていねいな小さい字でびっしり書き込まれ大変な努力家だったことがわかります。

悠然として山を見る蛙かな

春の昼下がり、一匹のかえるが悠然とした態度で大きな山と向かい合っている。
 中国、東晋（とうしん）の陶淵明（とうえんめい）の有名な詩の一節「菊を採る東籬（とうり）（東の垣根）の下（もと）、悠然として南山を見る」を踏まえており、悠揚迫らぬ隠者風のかえるの姿がユーモラスです。 （学研全訳古語辞典）

○15～50までの江戸での35年間、極貧の生活を送った一茶

一茶は「乞食首領一茶」と名のつたこともありました。

一茶の句には貧乏を楽しむ陽気な生命力、小さき者へ優しさ、へこたれない不屈の反骨精神があふれ出ています。一茶は芝居・講談・落とし話、それに酒もタバコ、甘いものも好きだったようです。

芭蕉

荒海や佐渡に横たふ天の川
 古池や蛙飛び込む水の音
 三日月に地はおぼろなり蕎麦の花

一茶

美しや障子の穴の天の川
 瘦せ蛙負けるな一茶是にあり
 蕎麦の花江戸の奴らが何知って

寝た犬にふわとかぶさる一葉かな
 団栗とはねつくらす子猫かな
 春立つや四十三年人の飯
 梅が香やどなたが来ても欠け茶碗

猫の子のちよいとおさえる木の葉かな
 棕鳥と人に呼ばれる寒さかな
 秋の夜や旅の男の針仕事
 ずぶ濡れの大名を見る炬燵かな

前書・・奥信濃に湯浴みして。 下下も下下 下下の下国の 涼しさよ

雲の上の上人さまにはおわかりになりますまいが、ここは信濃も奥の奥、雲の下のその下の、雪と貧乏の国でございます。それでもまあ、こうして湯につかっていると涼しいもんです。住めば都です。（名歌鑑賞1577）